
湖南省の辛亥革命と民衆文化

——姜守旦再来の謠言を中心に——

藤谷 浩悦

<東京女学館大学>

要 旨

一九一一年一〇月二二日、湖南省で革命が起きた。この結果、湖南省の正都督には焦達峯が、また副都督には陳作新が就いた。しかし、一〇月三十一日、焦達峯と陳作新は、新政権樹立後僅か一〇日で何者かの手によって殺害された。時に、焦達峯については、一九〇六年の萍瀏醴蜂起の指導者の一人、姜守旦が名前を騙った者であるという謠言が起きていた。謠言の背景には、焦達峯が姜守旦の名前を用い、民衆の末劫論や救世主待望論を鼓舞しながら、蜂起を凶ってきた経緯が存在した。このように、湖南省の辛亥革命は、民衆の末劫論や救世主待望論に代表される、民衆文化によって支えられていた。民衆文化は、革命成就後、各街巷における白い旗の掲揚、戯劇の武生の姿をした青少年の出現となって現れた。ただし、湖南省の郷紳、特に諮議局の議員は、このような状況に危機感を抱き、論功行賞に不満を抱く新軍の將校を用い、焦達峯と陳作新の暗殺を凶った。焦達峯と陳作新の死後、新たに湖南省の都督に就任した譚延闓は、文明化路線を推進する。このことは、民衆文化の封殺も意味した。そして、白い旗も紅・黄・藍・白・黒の五色旗に代えられた。いわば、湖南省の革命は、民衆文化を原動力としながら、やがては郷紳らの示す文明化の理念にすり代えられていったのである。

キーワード 辛亥革命、湖南省、姜守旦、民衆文化、末劫、白い旗

はじめに

従来の中国近代史研究においては、ままた政治指導者の思想や党派の綱領、宗教結社の理念、更に社会経済的な背景を考察することによって、運動の展開が跡付けられ、歴史的事象の意味が考えられてきた。しかし、歴史的に見て、政治指導者の思想や党派の綱領、宗教結社の理念と、思想、綱領、理念を受け止めた社会、運動に参加した民衆の思惑とは、多くの場合異なる。換言すれば、政治指導者や党派、宗教結社の内側には、思想、綱領、理念とは全く違う、民衆の願望や世界観が存在した。歴史研究がこのような点を見落とすならば、研究は奥行きを欠き、叙述も単調なものとなる。特に、歴史研究が、目的論的な説明、結果からの遡及的な解釈を行いがちであった点に鑑みれば、尚更のことである。歴史研究が、このような観点の持つ限界から抜け出すためには、一先ず歴史的な事象を政治的文脈から解き放ち、歴史固有の時空間の中に投げ出すと共に、地域社会の規範や価値、慣習など、民衆の思考や行動の範型を形作る民衆文化に考察を及ぼす必要がある。そして、このことによって、歴史的な事象の固有性や重層的かつ多様な側面が明らかになるように思われるのである。

一九一一年一〇月二二日、湖南省で革命が起きた。湖南省の正都督に就任したのは、会党の成員の焦達峯である。また、副都督には、新軍出身の陳作新が就いた。ただし、一〇月三十一日、

焦達峯と陳作新は、新政権樹立後僅か一〇日で、何者かの手によって殺害された。代わって、湖南省の都督に就任したのが、譚延闓である。閻幼甫は後年、焦達峯が暗殺された時の情景を、次のように回想している。「彭福生は、匪徒〔焦達峯の暗殺者〕が馬刀で焦都督の死体〔に着された衣服〕のポケットを探り、また衣服の襟を裂き、血を含ませて照壁に〔次のように〕書きなぐったのを目撃していた。『焦達峯は匪徒の首領である姜守旦が名を騙ったものであり、処刑すべきである』、と。この匪徒は手に一枚の紙切れを持ち、一字ずつ見ては壁に行って記し、書き終わると死体をちょっと見てから数回けり、すぐに隊列を作り東に向かって去った」¹、と。姜守旦と焦達峯は、別の人物である。ただし、辛亥革命の前後に、姜守旦と焦達峯が同一視されたことは、考慮に値する問題である。何となれば、照壁に記された文章の内容は、姜守旦と焦達峯を同一視する謠言の存在を物語るからである。このことは、焦達峯を姜守旦、すなわち会党の頭目とすることで、焦達峯の殺害の正当化を図ったと見なすこともできる。しかし、焦達峯が姜守旦の名を利用した形跡のあることも、否定できない。後者の場合、焦達峯はなぜ姜守旦の名を利用する必要があったのであろうか。

本論文は、姜守旦と焦達峯の関係を中心に、湖南省の辛亥革命と、辛亥革命を支えた民衆の願望や世界観に考察を加えるものである²。辛亥革命を民衆の反応に視座をすえて考察した研究に、張鳴の研究がある³。同研究は、革命派の宣伝工作の及んだのは知識人の上層に留まり、下層の民衆は革命を反清復明として捉えたとし、革命後の政府が民衆の辮髪を強制的に剃るなどして、民衆を心理的恐慌状態に陥れた結果、中華民国は不安定なものになったとする。ただし、張鳴の研究は、余りに概括的である。本論文は、これに対して、湖南省という地域の歴史的文脈に沿って考察する。そして、辛亥革命と民衆の関係について、民衆の願望や世界観、及びそれらに影響を与えた地域社会の習俗や習慣、すなわち民衆文化に分析を加える。中心とするのは、次の三点である。第一点は、姜守旦の湖南省における行動、及び焦達峯が姜守旦の虚像を利用した理由である。第二点は、姜守旦の虚像が湖南省において持った意味と、民衆の願望や世界観、及び民衆の辛亥革命に対する期待である。第三点は、これら民衆文化の考察から解明される、湖南省の辛亥革命の重層構造である。

第一章 清末の湖南省城

第一節 新政と民衆

長江流域の米価の高騰は一八九八年、一九〇六―七年、一九一〇―一一年の三つの時期をピークとし、米騒動もこの三つの時期に頻発した⁴。米騒動の直接的な契機は、水旱害など自然災害にある。ただし、より重要な事柄は、民衆の生活が度重なる自然災害に耐えきれない状態になっていたことである。光緒新政の遂行は、湖南省の財政を悪化させた。すなわち、湖南省の財政は俞廉三の湖南巡撫在任中（一八九八―一九〇二年）には印紙税、米穀税、土薬税、塩税の増額、広東塩に対する販売許可税が徴収されて一九〇二年には省庫の剰余金が三〇〇余万両に達したが、広西省の辺境で起きた反乱鎮圧のための軍事費、新政の経費、災害救恤金、銅銭の鑄造停止、粵漢鐵路回収資金などにより、一九〇六年以降は毎年一〇〇万両前後の欠損を出すに至った⁵。この結果、過重な税負担により、民衆の生活は困窮した。また、清末は、物価が

高騰の傾向にあった。米価の高騰は米商人や仲買人を利したものの、圧倒的多数の佃戸には好影響を与えなかった。更に、銅元の濫造は貨幣価値の下落を引き起こし、かつては制錢一二〇〇文で米四斗買えたものが、この頃には制錢一二〇〇文で米二斗も買えぬ有り様となっており、民衆の生計に深刻な打撃を与えていた⁶。

このような中で、一九一〇年四月、湖南省城において、清朝の内外を震撼させる事件がおきた。一九一〇年の長沙米騒動が、それである⁷。同騒擾は、前年来の天災と米価高騰に端を発し、米の平糶を求めた民衆の請願運動が地方官の不手際や一部郷紳の教唆、会党の煽動によって暴動と化し、米店、米倉のみならず、巡撫衙門、学堂、教会、キリスト教宣教師の住居、外国人経営の会社、船舶が破壊、略奪された事件である。時期は、ほぼ三つに区分される。第一期は四月一日と一二日に起きた黄貴蓀なる者の一家心中、碧湘街における老婆と米店の口論、及び民衆による米店の打ち壊しに始まり、一三日夕刻の群衆による巡撫衙門での平糶請願までである。第二期は四月一三日深夜の群衆と巡防營の間に起きた小競り合いから、一四日午前の新軍による群衆への発砲、巡撫衙門焼き討ちまでである。第三期は四月一四日の午後に発生した学堂・教会・外国人施設の焼き討ちから、布政使莊賡良による巡撫護理の宣言をへて一五日に騒擾が平定するまでである。四月一四日夜、青い衣服を纏い、青い頭巾で頭を包んだ一群の人々が湖南省城内に現われ、各所を焼き討ちした。イギリスの長沙駐在代理領事ヒューレットによれば、この一群の人々は白い腕章を腕に巻いていた⁸。

一九一〇年の長沙米騒動後、湖南省では末劫の到来を伝える謠言が頻りに起こった。同年六月一三日付け『大公報』〔天津〕では、次のような湘潭の様態を伝えている。「湘潭県では昨日〔旧暦四月〕以後、しばしば匿名の掲帖で、相約して期日を定め蜂起するとあった。幸いにも、現在に至るまで、尚お平穩である。ただし、各郷の穀米の強奪は、時に聞くところがあった。該県の七都地方では、凡そ家に蓄えがあれば、強奪されて空とならないものはなく、かつ乱民の称える所によれば、本年再び種を植えることを許さず、貧富を論ずることなく、必ず共に滅ぶべきである等の語があった。近日、該処では、遂に乱民が田に植えてある稲を全て抜き、道端に捨てて、田家もあえて抵抗もしないことがあった。聞くところによれば、数日で二〇里の遠くにまで及び、全ての郷民も大いに震え動いた」⁹、と。また、同年六月二七日付け同紙でも、湖南省城の様態を次のように伝えた。「〔湖南〕省城では以前、外来の人の妖言で人を惑わすことがあり、湖南では〔旧暦〕六月に大劫があるであろうと称え、関帝戦詔を印刷し、到る所に伝播・配布した。中には『吾神靈中看全境皆流血〔我が神靈の中には全境が血だらけであるのが見える〕』などの語があった。事は、大吏の聞く所となり、行為や挙動が酷く拳匪に類似しているため、既に水陸兵勇をして認真に捉え、追求させた」¹⁰、と。いずれも、末劫の到来と共に、全てが滅ぶとしたのである。

第二節 湖南省の謠言

一九一〇年の長沙米騒動では、多くの掲帖が現れた¹¹。掲帖の一つには、次のように記されている。「白犬と金鶏が現われ、仲間は均しく至る。首但と春台は信ぜり、千金でも改まらないと。ある日青馬が到り、頭に均しく白巾を巻いている。各々一振りの刀を持つ、皆な敵を殺すために。この戦いは通常でなく、宣統も長くない。中華十八省は、均しく姜に帰す。水曜日

正明、前路に主人は無く、有る人は参透し、我が漢は此に興る。丕漢元年酉日論」と。そして、同掲帖を紹介した村山正隆は、同掲帖の「白犬金鶏」に「犬ハ戌、金ハ秋ノ気。鶏ハ酉、即チ今年秋季冬初ノ意？」と、「首但春台」に「瀏陽の匪首龔春台、姜首但の意？」と、また「有日青馬」に「隠語？」と、「水曜月正明」に「八月一五日」と注記した¹²。同掲帖はイギリス側も収集しており、次のように意識している。「本年〔旧暦〕四月に我ら将校は相い会することを策してきた。我らは守旦の兵に信頼を寄す。千金を以ても我らを動かしえまい。〔五月〕二日に『黒い騎士』がやって来るであろう。彼らは頭に白い頭巾を巻き、皆が剣を持っておろう。敵を殺すために。今の統治は長く続くまい。やがて、中国の一八省は姜に従おう。〔この間の内容は意味不明のため省略〕これ以前にはいかなる指導者も現われなかった。この掲帖の意味を解しうる汝ら。汝らは新しい王朝の到来を知るであろう」¹³、と。

この掲帖には、一九〇六年の萍瀏醴蜂起における指導者の一人、姜守旦の名前が記されていた。そして、一九一〇年五月二〇日付け『ノース・チャイナ・ヘラルド』紙は、同掲帖について次のように解説した。「種々の屋敷の壁や街の城門〔に掲げられた掲帖〕には、和解や平和を証明するものはなかった。掲帖の内容が革命を示唆したことは、明白である。……掲帖の一つは、『宣統の統治は長く続くまい。程なく中華（王朝）の一八省は皇帝姜〔守旦〕に従うであろう』と宣言した。次に皇帝になるであろう者とは、一九〇六年の萍瀏醴蜂起に加わった姜守旦のことを指す。彼は、彼の首と引き換えに高い報酬が出される予定であったにも関わらず、逮捕されてはいなかった。彼が依然として逃走中であることによって、彼は彼の名をいうだけで威力を発揮する者となった。掲帖の読者は、彼の名がかくも明確に使われているので、恐らく彼は事件〔一九一〇年の長沙米騒動〕と無関係であろうと考えている。『白い犬と銀の蛇が現れる』とは、『本年の〔旧暦の〕四番目の月』を示している。〔旧暦の〕四番目の月の二日（〔西暦〕五月二九日）には、『黒い騎士』が現れる約束となっている。これらの『黒い騎士』は、時に『正義の兄弟たち』と呼ばれることもあるが、この名の呼び名からは『拳法家』と呼び習わされている義和団との関係が確かに窺われる」¹⁴、と。

この掲帖からは、次の五点の特徴を指摘することができる。第一は、一九〇六年の萍瀏醴蜂起の首謀者である、龔春台と姜守旦の名が記されたことである。特に、姜守旦は「やがて中国の一八省は姜に従おう」として、新しい王朝の創始者に位置付けられた。第二は、蜂起軍が「青馬の日」に起こるとした点である。イギリス側は、「青馬の日」を、旧暦四月二日、西暦では五月二九日とした¹⁵。第三は、蜂起軍の特徴として、頭に白い頭巾を巻いた点を挙げたことである。更に、イギリス側はこの点を、「黒い騎士がやってこよう」と意識した。第四は、日本側が、新しい王朝が立てられる日、すなわち「水曜月正明」に、「八月一五日」と注記したことである。旧暦八月一五日すなわち中秋節は、満洲族の滅亡する日と伝えられた。第五は、蜂起による新しい王朝を「漢」とし、掲帖の日付も「丕漢元年酉日」としたことである。この他にも、掲帖には、山東省の義和団におけるものと同様、大劫がまさに至り、紅花が咲き乱れ人々が苦しみの泥沼に陥る時、真主が現われ選ばれし人々を苦しみから救うであろうという内容の掲帖も現れた¹⁶。すなわち、一九一〇年の長沙米騒動における掲帖は、一九〇〇年の義和団運動や一九〇六年の萍瀏醴蜂起と繋がっていたのである。

第三節 焦達峯の策動

一九一一年一〇月二二日、革命派が湖南省城で蜂起した。同年十一月一八日付け『ノース・チャイナ・ヘラルド』紙は、「黒い騎士」の表題で、次のように述べている。「ちょうど今日のことだが、一連の偶発的な出来事に最もぴたり適合すると私の思う噂が、この流儀で情報を伝えている。今年の三月か四月のことであるが、瀏陽生まれの者が長沙に来た。とりあえず、その者を焦達峯と呼ぶ。彼は教育を受けたことがあり、外国にも行ったことがあった。数年間、彼は孫逸仙〔文〕のグループに加わっていた。全く異なる姜〔守旦〕という名前で、五年前〔一九〇六年〕に郷里の村で不運な結末となる反乱〔萍瀏醴蜂起〕を組織した。彼は戦った後、逃亡することができた。しかし、数百人の彼の仲間は、戦闘や中国の役所の残忍な方法で殺された。昨年〔一九一〇年〕、五年前の彼の名前は（恐らく彼自身はそうとは知らなかったが）、あらゆることをすると街を脅迫する、提示された匿名の掲帖の中で、使われた。ちょうどその頃、彼と彼の『黒い騎士』が到着した。この経験豊かな反逆者、焦達峯は、兵舎を頻りに訪れていた。数ドルの金を借りたい兵士は、誰でも彼から容易に借りることができた。位階の低い将校たちは、彼らの収入に比べて更に多くのお金を借りることができた」¹⁷、と。ここでは、焦達峯を、姜守旦と同一人物としている。

焦達峯は、一八八七年一月一六日、湖南省瀏陽県焦家橋に生まれた。四歳より学問を始め、家塾に入って師の黎尚姜を通じ排滿思想に触れた。一八九九年に瀏陽県立南台高等小学堂に学び、一九〇二年に同校を卒業後、黎尚姜の紹介で姜守旦の率いる洪福会に入った。黎尚姜の知人に、張紫館がいた。黎尚姜と張紫館は、陳柱才の家に道教の仙壇を設けて扶乩を行い、乩語を借りて「排滿興漢」を宣伝した。焦達峯も、扶乩に関心を示した。一九〇三年、焦達峯は長沙に至り、華興会の創立した東文講習所で日本語を学び、また同仇会に入り会党との連絡にあたった。一九〇四年、焦達峯は日本に渡り、中国同盟会に加入したが、程なく帰国した。一九〇六年に萍瀏醴蜂起に参加し、李金奇の参謀を務めた。しかし、蜂起は失敗し、焦達峯は再び日本に渡った。そして、一九〇七年に日本の東斌学堂に入学して軍事を学び、共進会が発足すると聯絡部長（交通部長）になった。一九〇九年春に帰国、漢口フランス租界内に共進会湖北総機関を、武昌に分機関を設立し、同年八月には湖南省に入り、長沙に共進会湖南総機関を設立した。また、会党諸派を洪江会の名の下にまとめ、三十数人の龍頭大哥に推され、会党の首領となった。一九一〇年四月、湖南省城で長沙米騒動が発生した時、焦達峯は長沙界限にいて、配下の者を瀏陽と醴陵に派遣し、両地の洪江会を蜂起させて長沙の奪取を図ると共に、湖北省にも連絡し、蜂起を企てていた¹⁸。

一九一〇年の長沙米騒動後、掲帖は誰の手で、如何なる目的で、張り出されたのであろうか。日本の長沙駐在副領事村山正隆は、掲帖の出所の一つに新軍と巡防營の兵士を、他の一つに会党の成員を考えていた¹⁹。すなわち、掲帖の配布には、複数のグループが関与した。この頃、共進会は、様々な手段を講じ、湖北新軍や湖南新軍の中に勢力を扶植した。また、焦達峯も焦達人、彭友勝などと四正社を設立し、巡防營にも会党の黨員を送り込み、多数の中下級の軍官を会党に加入させた²⁰。このように見た場合、掲帖を配布したグループの一つに、焦達峯の党派も指摘できるように思われる。焦達峯の意図は、湖南省に不穏な空気を醸成し、革命の気運を盛り上げる点にある。そして、焦達峯は、革命の気運の醸成に際し、姜守旦の名を利用した。

すなわち、姜守旦を救世主として喧伝し、かつ自らを姜守旦の後継者に位置づけた。姜守旦と焦達峯の共通点は、次の三点にある。第一点は湖南省瀏陽の出身であったこと、第二点は会党の頭目であり、一九〇六年の萍瀏醴蜂起に加わったこと、第三点は白を標識としたことである。それでは、姜守旦とは一体いかなる人物であったのであろうか。

第二章 姜守旦と洪福会

第一節 姜守旦の半生

姜守旦は一八六三年五月六日（同治二年三月一九日）、湖南省瀏陽県官渡郷雲山村に四人兄弟の末子として生まれた。父は姜本脈、農家と医者兼ねた。武芸に秀で、姜守旦も父から武芸の手解きを受けた。姜守旦は幼少の頃、村の塾学に学んだが、家庭の貧困から二年で辞め、村人の経営する石灰窯で働いた。記憶に優れ、運搬用に石灰を積める作業では毎日数百担の数を全て暗記し、夜に帳場で数合わせをしても狂いがなかった。姜守旦は先祖伝来の医術も継ぎ、病を治しても代金を求めず、村人の尊敬を集めた。姜守旦は石灰窯で働いていた時に、先輩の勧めで哥老会に入り、三〇歳をへた一八九三年頃、郷里を離れた。以降、各地を渡り、その間に多くの武術家を知り、名師の指導も受け、武術は進み、気功も精緻となった。この間、主に江西、四川、湖北の各省を転々とした。一九〇〇年の唐才常の自立軍蜂起では、姜守旦は「香長」を担った。やがて、姜守旦は王茂先に改名を図るが、姜の上下を断ち切った字が王であり、不吉との理由から、名を万鵬飛と変えた。鵬が一たび飛翔すれば万里に及ぶ、との意味である。ために、洪門の兄弟は彼を万大哥と呼んだ²¹。

姜守旦の生地、雲山村では、姜守旦の出生に前後して二つの大きな蜂起が起きた。一つは一八五二年の徴義堂首領・周国愚による蜂起であり、他の一つは一八六七年に姜守東が起した蜂起である。同治『瀏陽県志』巻一三「兵防」においては、「〔周〕国愚は身体が短小で容貌が醜悪、頗る技勇を習った」とし、徴義堂を組織、会徒二万余名を集めたとする。周国愚は太平天国と気脈を通じ、ために官憲に迫られて蜂起に及んだ。姜守東も江西省の曾幟才と連携し、清朝に対し蜂起を企て、「〔姜〕守東の哥老会は紅教を喜ぶ」と言われていた。同史料は、「土匪」の変じたものに哥老会と教匪の二種があり、哥老会は端緒が不明だが、教匪には黄、紅、白の三種があり、足跡が秘匿されていて推察しがたいとし、更に次のように述べた。「教匪は凡そ三種があり、黄、紅、白といったが、偽妄なることは同じであった。凡そ逆首は黄教で愚民を繋ぎ、浩劫〔大災害〕の説を流布して畏怖させた。紅教、白教は逃亡者を集めて乱の謀をなし、黄教は始めこそ茹齋〔肉食を断つ〕するも、後には悉く酒色に溺れた。伝えられる所ではこれは江西で唱えられたという」²²、と。ここで、教派が江西省から湖南省に伝えられて、瀏陽の「教匪」が起こったとした点は、注目される。

一九〇七年一月一〇日付け『時報』では、姜守旦について「探査した所によれば、姜守旦とは万鵬飛のことであり、約五十余歳、身体は痩せて髭があり、西洋タバコを吸い、神打を習得した。瀏陽東郷の姜永緞の人である」と記していた²³。姜守旦もまた神打、すなわち紅燈教の徒であった。従って、符を画き、咒を念じ、神々を身体に憑依させて拳法を行ったのである。そして、そのことによって、人々を引き付けたのであろう。姜守旦が何時いかなる土地で、神

打を習得するに至ったのかは、不明である。姜守旦は、一九〇〇年の唐才常の自立軍蜂起以降、一九〇六年の萍瀏醴蜂起の前後まで、足跡が不明である。或いは、この間、神打の奥義を習得したのではなからうか。一九〇二年は、四川省で紅燈教が猛威を奮った時期にあたる。姜守旦も同時期、四川省にいた可能性がある。紅燈教は、『五公経』を經典の一つとした。そして、数種ある『五公経』の中の一つ、『五公末劫経』には、「〔聖主が世に出づる時〕、黒衣は白衣に変わり、日月のように明るくなる。七日七夜、黒風が世界を巡り、雷雨電雷が天地を揺るがすが、例え多数の兵が来〔て殺戮を行つ〕たとしても、この符〔唐公符〕を帯びる限り身は安全である」と述べ、白衣が重要な意味を伴って現れていた²⁴。

第二節 湖南省の会党

白蓮教は、仏教の白蓮宗から変じた、時々の王朝で邪教と宣告されてきた民間の秘密宗教である。一七九六年に、嘉慶白蓮教の乱を起こして後、白蓮教徒は四散し、一部は青蓮教の名目で活動を継続した。道光中期、青蓮教は四川、湖北、江西、広東、広西、福建、陝西、甘肅、雲南、貴州、江蘇、湖南の各省で組織を形成した。やがて、青蓮教は摘発され、壊滅的な打撃を受けた。教主の一人、郭建文は劉儀順と改名し、四川省に隠れて秘密裡に教を伝えた。一八五七年、劉儀順は貴州省に移り、布教に燈火を用いた。これが燈花教である。燈花教は、燃燈教ともいった。咸豊・同治年間、清朝政府は、しばしば燈花教を禁じた。時に、湖北、四川、貴州で活動中の燈花教徒は、紅燈教の名で貧民を動員し、清朝に対抗した。何れも、「照り輝かせ燈火を拝む」「精進潔斎し経を念ずる」「符水を用いて病を治す」「扶乩により神を降す」などの特徴を持った。紅燈教は、燈花教の変じたものである²⁵。そして、民国『統遵義府志』は、「劉儀順、又の名が依元は、四川省涪州鶴游坪の人である。燈火教を習い、夜に拝し経を誦し、燈火は瞬く間に開花し、幻術を借りて人を惑わし、ために燈火教と称した。又の名は清蓮教、或いは清水教といい、白蓮教の遺孽である」と記した²⁶。

一九〇六年の萍瀏醴蜂起では、山東省の義和団の他、在理教の影響が指摘されていた。そして、一九一〇年、湖南・湖北両省の調査にあたった遠藤保雄も、次のように報じていたのである。「白蓮・在理は直隸・山東地方を巢窟として北清一帯に蔓延し、塩梟は江蘇・浙江・安徽を根拠として長江の下流に蟠屈す。彼等の巢窟とし根拠とする処は、元より湖南を距る〔こと〕甚遠しとなす。然れども、白蓮・在理の徒は鉄道其他の工夫として漸次南下し、塩梟の徒は頻繁なる水路交通に由つて、漸次羽翼を上流に張らんとせり。之を以て、近来此等匪徒の湖南に侵入せるもの、甚尠からざるが如し。現に〔一九〇一年の〕長沙暴動に際して、北清事変に於ける団匪と同一の服装をなせる凶徒数人、忽然として乱民の先頭に現はれ、暴動の指揮を取り、学堂・衙門・洋館等を焼毀し、事終るや條忽として姿を失せんが如き、其指揮進退の巧妙にして機敏なる、純然たる団匪なりとの風説あるを見るも、又近頃湖南匪徒の間に神打と称して、一種の拳法の練習盛なるに見るも、苦力に混じて白蓮・在理の徒の南下せるは、疑ふべからざる事実となす。塩梟に就いては未だ確聞する所有らずと雖、彼等の多くが湖南混徒の内に混入せるは、地方官民の均しく認むる所なり」²⁷、と。

一九〇七年、宗方小太郎は、湖南省に流入した在理教の特徴について、次のように報じている。「〔在理教は〕白蓮の末流にして観音菩薩を尊で聖宗と為し、楊祖を祖師と称し、平日焼香

座禅を以て事と為す。其の集会処を公所と名く。教内隠語甚だ多く、並に最要の五文字有り、父母妻子と雖ども敢て伝へず、伝ふる者は冥罰立ろに至り、奇災其身に及ぶ。若し災難に遇ふの時此の五字を黙誦すれば祖師即ち来りて救護すと云ふ。……各府州県の公所多きは六七百、少きも百数十人の信徒を有し、朝夕焼香礼拝を行ふ。往々衆を恃で平民並に耶蘇教民と難を為す事有り。此教に入る者は烟を吃せず、酒を飲まず、戒を持する事極めて堅し。清国に於ける秘密結社中哥老会に次ぐる大団体なれども、白蓮教時代の如く政治的行動を為さざるを以て、官府の禁制も亦た哥老会に対するが如く厳ならざる者の如し」²⁸、と。一九一二年五月二五日付け『大阪朝日新聞』紙上では、「在理会〔教〕は一名白衣道教とも云つて、皆白色の衣服を着し、辮髪には白絲を交へ、恰も喪服中にある様である。故に之から在礼の名が起つたと云ふ説もある。思ふに明の亡びたのを弔ふ意味がある」と記載されていた²⁹。すなわち、在理教は白を基調とする集団であったというのである。

第三節 姜守旦の死後

一九〇六年、姜守旦は蜂起を決意した。同年三月から四月にかけて、孔金唐を陳鴻賓のアヘン窟に赴かせ、職位を与えて組織固めを図り、また六月から七月にかけ、範金田に姜守旦の書簡を携えさせ、蜂起の期日を一〇月頃に変更した³⁰。一〇月、姜守旦は、江西省の銅鼓県、万載県より、湖南省瀏陽県の陳家坊、張坊一帯に移った。率いたのは、手に鳥銃、刀槍を持ち、服装も不揃いの会徒百余名であった。姜守旦の軍は陳家坊を出発すると瞬く間に増えた。ただし、彼らが携えたのは僅かに木棍、竹竿、火叉、火鉗などであった³¹。一〇月後半、姜守旦は三百余名の兵と共に、瀏陽東郷の三口に至り、大団総の王頭疇の屋敷を襲うと共に、王の米倉を開き、米を貧者に分け与えた。ついで、姜守旦の軍は蔣興貴の洋槍隊一〇余名と交戦して負傷者百余名を出し、形勢不利と見るや、目標をかえて清朝の官吏である李進初の屋敷（「植本堂」といった）を襲い、次に村の悪玉・王勉堂を殺害し、富嶺、大光洞に撤退した³²。一二月、姜守旦は龔春台の蜂起に応じて、再び瀏陽県城の攻撃を図るが、進軍途上に官軍との戦闘に敗れ、以降各地を敗走して「終わるところを知らず」といわれた³³。

一九〇六年一二月二五日付け『申報』は、姜守旦の蜂起を次のように記した。「瀏陽の蜂起では、某日に県城を攻撃し某日に監獄を強奪すると宣言した。かつ、掃清滅洋、革命義軍の旗号を打ちたて、更に貧民には迷惑をかけず、ただ官長を襲撃・殺害し、あくどく富をなした者の家を襲撃すべきであると称えた。ために、各郷の富家で強奪された者は数えきれなかった」³⁴、と。「掃清滅洋」とは、苦しみの根源を清朝や外国人に求めたことを意味する。ある報告は、蜂起軍について、「匪の勢いは甚だ盛んで、約三千余人がいて、白布白衣にて白旗に革命軍と大書した」と報告した³⁵。蜂起軍が象徴とした白布や白衣については、従来様々な指摘がなされてきた³⁶。ただし、既に指摘したように、湖北・湖南両省には、直隸・河南両省より、白蓮教徒・在理教徒が鉄道工夫として大挙流入したが、このうち在理教の信徒は白い衣服を着て、白を象徴とした。姜守旦の蜂起軍の白布や白衣を着ける習慣は、在理教徒の装いに近似する。ただし、姜守旦が紅燈教の徒であり、かつ蜂起を起こす際に「掃清滅洋」を標榜した点に鑑みれば、白布や白衣を着けることは戦争や災害から逃れる意味を持ち、白もこの世の汚れを払い、本源的な世界への回帰を示したようにも思われるのである。

一九〇七年六月、江西省義寧州知州の金沛田は、消息不明のはずの姜守旦が同州の漫江地方で仲間を集め、密かに茶箱の装いをして武器・火薬を運び、即日蜂起するという情報をえて動揺した³⁷。のちに、蜂起日は同年六月八日、茶市の混雑に紛れて決行されるとの情報が流れた。湖南・江西両省の常備軍は、厳戒態勢を強めた³⁸。情報は錯綜したが、やがて蜂起計画は捏造とわかった。同地の某茶荘に、藍水東と何発梧なる者がいた。藍水東は茶葉の選別の組頭、何発梧は会計である。藍水東は、同地の王家に恨みを抱いて謠言を流し、姜守旦がかつて王方福、王富喜の家に至り、蜂起計画をしたと述べ、何発梧と謀らい王家を無実の罪に陥れたのである³⁹。同事件からは、次の二点が明らかとなる。第一は、一九〇六年の萍瀏醴蜂起の中心人物である龔春台と姜守旦の二人を比べた場合、民間では姜守旦の方が著名であった点である。第二は、姜守旦の名が、本人の生死に関わらず、湖南・江西両省の官憲を脅かす程の影響力を持った点である。姜守旦による蜂起の噂は、後にも度々起こった⁴⁰。このことは、姜守旦が蜂起軍の首領として偶像化され、名前が一人歩きしたことを物語る。

第三章 革命の重層構造

第一節 湖南省の革命

一九一一年一〇月一〇日、湖北省の武昌で革命派の蜂起が起きた。湖南省でも、湖北省に呼応して、革命派による蜂起が計画された。一〇月二日、革命派が湖南省城で蜂起し、焦達峯が正都督に、陳作新が副都督に就任した⁴¹。焦達峯が正都督、陳作新が副都督になると、都督府で叙任が相次いだ。一〇月二三日、清朝時代の旧諮議局議員は、この状況に危機感を抱き、焦達峯に対して参議院の設立を認めさせた。参議院の職務は、政治上の全施策の議決にあった。更に、一〇月二五日、湖北省の例に倣い、湖南省でも都督の下に民政・軍政の両部を置くことに決した。しかし、一〇月二六日、この規定にも関わらず、焦達峯は参議院の承認をへずに、楊任を西路招撫使、馮廉直を南路統領に任命し、内部対立が再び表面化した⁴²。一〇月二九日、五〇標第二営管帯梅馨、統帯余欽翼の呼びかけで、軍関係者による会議がもたれた。席上、焦達峯、陳作新の人材登用、金銭乱費が話題に上り、両名の殺害が提議された。一〇月三十一日、梅馨は部下に和豊会社の取り付け騒ぎを起こさせ、陳作新が同件の巡視のため一人で赴くと、陳作新を北門鉄仏寺で待ち伏せて殺害した。同時に、吳家銓の部隊を都督府に赴かせ、焦達峯を殺害した⁴³。代わって、新都督には、譚延闓が擁立された。

一九一一年十一月九日付け『申報』は、焦達峯と陳作新が殺された理由について、「湖南省の常備軍〔新軍〕は近日紛々と密議し、正都督焦達峯と副都督陳作新が会党の頭目や無頼のならず者であり、出身は正大ではなく、今回の都督就任も大勢の推挙によらず、近日の執務も甚だ曖昧で、私人を信任し、賞罰も多くは不公平で妥当でないと述べ、しばしば群起して攻撃を凶った」と記した。そして、譚延闓が新しい都督に推戴された様子については、次のように述べている。「各軍士は〔譚延闓に対して〕、この事〔都督就任〕は我らが街ごとに説諭して回り、必ずや人々を驚かせないようにするため、都督は熱心に仕事を行い、心配なきことを望むだけであると述べた。そこで、譚延闓も長時間演説をしたが、言葉は謙虚を極めた。すると、各軍士も一斉に拍手し、丁重に命令を聞いて退き、高脚牌によって焦〔達峯〕と陳〔作新〕の罪状

を宣布し、誅殺を加えなければならないとした。また、別の牌に『公挙譚延闓大都督』の八字を上書き、多くの人を派遣し、街を練り銅鑼を鳴らし、両牌を随時巡行させ、民衆に知らせた⁴⁴、と。焦達峯、陳作新の殺害後、湖南省城は恐慌状態を極め、新軍が都督府を保護し、夜通し空砲を鳴らす一方、譚延闓は焦達峯、陳作新の功績を讃え、厚く埋葬し、銅像を鑄造して記念とし、家族に見舞金一万両を給付した⁴⁵。

同記事からは、次の三点を指摘することができる。第一点は、焦達峯と陳作新が会党の頭目、無頼のならず者として、批判された点である。ここからは、前諮議局議員や日本の士官学校卒業生などエリート層の、焦達峯や陳作新に対する侮蔑の念を見て取ることができる。第二点は、焦達峯、陳作新の正・副都督就任が大方の推挙によらず、政務も妥当を欠いたとした点である。ここには、牌に「公挙譚延闓大都督」とあるように、都督は「公挙」によるという、暗黙の了解があったように思われる。第三点は、焦達峯が正都督就任以降、人事や賞罰に公平を欠いたという点である。新政権樹立には、新軍と会党が大きな役割を果たした。このことは、新政権樹立に新軍と会党が大きな役割を果たしたにも関わらず、新軍の将校が会党の成員に比して、冷遇されたと意識したことを意味する。これら諸点は、複合的に絡まりあった。ただし、亀裂の構造は、先ず新軍の将校、特に日本の士官学校卒業生の人事や賞罰、更には政務の混乱に対する不満があり、それら不満が焦達峯、陳作新の大方の推挙に拠らずに正・副都督に就任したという点を口実に噴出したということができる。

第二節 焦達峯の暗殺

粟戡時は後年、一〇月二日に湖南省城で蜂起が起きた時の模様を、「長沙が既に平常に復すると、各家家では均しく門前に高く白い旗を掲げ、ある場合には旗の上に『漢』の一字が書込まれ、慶賀の意を現わした」と回想した⁴⁶。白旗は、革命軍に対する歓迎の意を示した。そして、湖南省では、瞬く間に全省で「漢」の字を記した白旗が掲げられた。また、陶菊隱は、革命後の湖南省城の各街巷で起きた出来事について、「私より年長の者の回憶によれば、大街小巷で常に戯劇の武生のように化粧した青少年が現れたというが、私は出会ったことはなかった」と回顧した⁴⁷。更に、子虚子『湘事記』も、次のように述べている。「〔焦達峯都督就任後〕一時に城中の廟宇、公所、客棧には募兵の旗幟が高く掲げられ、車や駕籠の担ぎ手、ならず者、乞食は、皆な相率いて軍営に投じ兵となった。武器もなく、軍服もなく、皆な高い髻を結び玉の刺繍をして、胸の前には長い帯を垂れ下げ、漢代の官吏の立ち居振る舞いに似て、戯劇の中の武伶のような装いであった。都督府より市塵街巷に至るまで、全てがこのようであった」⁴⁸、と。武生の装いをした若者は、一九〇〇年の山東省の義和団でも現れている⁴⁹。若者たちは、戯劇の武生の姿を借りて、あるべき理想の世界を表現したのである。

このような中で、一九一一年十一月五日付け『民立報』は、焦達峯について次のように報じている。「湖南正都督焦大章〔焦達峯〕は本月〔旧曆九月〕一〇日〔一〇月三十一日〕に殺害された。殺害の原因は、焦の仕事が公平でなかったことによるが、実際は〔焦が〕会党の頭目で、革命党ではなかったからである。……焦大章を知る者がいて、次のように述べた。焦は瀏陽の人で、以前に西洋に留学の経験があり、某大学の修業証書を取得した。ただし、〔焦が〕革命を称えたため、同族の者は災禍を恐れて早期に駆逐を宣告し、〔焦は〕後に姜守旦に殺された。姜

守旦は修業証書を掠め取り、焦大章の名を騙り、革命党と偽った。正都督に就任後、焦の親戚・旧友は省城に来て面会を求めたが、焦は避けて面会をせず、焦達峯の父兄もまた省城で染業を商い、行き来しながら面会ができず、ために人は多くこれを疑った。調べてみると、姜守旦は瀏陽の著名な匪賊の首領で、しばしば清朝の各督撫が逮捕の命令を出し、報告がなされた。ために、「[姜は] 焦の名前を借りて、新軍との連絡を行ったのである」⁵⁰、と。焦達峯と姜守旦が同一視された背景には、焦達峯が姜守旦の名を用いて、蜂起を図ってきた経緯が存在した。焦達峯が姜守旦の名を利用した理由は、明白である。姜守旦が行方不明であったことにより、民衆の救世主待望論が投影しやすかったからである。

民衆にとって、辛亥革命はいかなる意味を持ったのであろうか。或いは、民衆は辛亥革命とどのように関わったのであろうか。民衆は、多くの場合、記録を残すことがない。しかし、湖南省城における蜂起後に、湖南省城の各街巷で起きた様々な出来事を観察することにより、民衆が辛亥革命に託した思いを知ることができる。民衆は、蜂起の成功を知ると、湖南省城の各街巷に白い旗や漢と記された白い旗を掲げた。民衆にとって、白い旗は、この世の汚れを払い、新しい世界を開き、失われた秩序を回復し、或いは理想の世界を実現するための象徴的な意味を持っていたのではなかろうか。そして、各街巷における若者たちは、失われた秩序の回復、あるべき理想の世界の実現を図るために、戯劇の武生の想像上の力を借りたのである。湖南省正都督の焦達峯が姜守旦であるとの噂の起きたのは、この時である。これよりすれば、湖南省の郷紳らが焦達峯に抱いた不安は、焦達峯の背後にある姜守旦の影であったともいうことができる。換言すれば、焦達峯の暗殺とは、焦達峯個人の殺害よりも、民衆が姜守旦に託した願望や世界観の抹殺、封殺を意味したのである。

第三節 文明化の象徴

一九一一年一〇月一〇日の武昌蜂起後、清軍と革命軍の攻防は、湖北省の中南部、漢口の西に位置する荊州の地で、一大決戦を迎えた。荊州は、古くからの軍事上の要地である。そして、清代、荊州には満洲八旗が駐屯し、四川省に対する防備に務めた。荊州は革命軍と満洲八旗の激しい戦闘をへて、革命軍の手に落ち、長江流域における革命軍の勝利は決定的となった。一九一一年一月一日、湖南省城では、荊州の戦勝を祝う祝賀会が開かれた。譚延闓は布告により、都督府や各衙門、各公共団体に国旗の掲揚を命じた他、漢の字を記した白旗の新調を命じた⁵¹。ここでは、国旗と白旗が併用された。一九一二年一月一五日付け『申報』は、次のように記している。「長沙では〔旧暦一月〕一三日〔一九一二年一月一日〕、荊州攻略の祝いをした。この日、街市の店舗は国旗〔五色旗〕を揚げ、堤燈を掛けて飾り付けをした。都督府や教育会も数百の電燈を用い、紅や緑で配色し、異常に人々の眼を喜ばせた。男女は群れをなし、見る者も垣根のようになった。軍・学・商界の数万が街市を練り歩き、口々に破荊州歌を唱い、衣服も整い、都督府に至り声を揃えて中華民国慶賀万歳と叫んだ。この晩も同様に、各人は手に紅い堤燈を持ち、内に荊州祝捷会と書いて記念とした」⁵²、と。ここに、「滅満興漢」の呼称は去り、「中華民国慶賀万歳」の掛け声が鳴り響いた。

これより先、一九一一年一二月二日付け『申報』には、次のような記事が掲載されている。「湖南省の譚〔延闓〕都督が命令を出して、士農工商、軍警、官紳を論ずることなく、布令を

出した日より、一律に辮髪を剪らしむべきであると曉諭した。譚都督は、各界で既に剪り除いている者は固より多いが、遅々として様子を伺っている者も頗るいると考え、府内の全ての人員、夫役に即日剪り除かせ、模範とさせた。そして、少しでも抵抗する者があれば、厳しく処罰させた⁵³、と。すなわち、譚延闓は、強制的に辮髪を剪り取る方策にでた。凌盛儀は同日の日記に、各街巷での辮髪を剪り取る模様について、次のように記している。「省城の兵丁が、各街巷において、強制的な手段を用いて人々の辮髪を剃った。涙して泣き免除を求める者、跪いて拝み免除を求める者もいたが、均しく免除は許さえなかった。今日、数千人〔の辮髪〕が剃られ、誠に痛快である。都督が布告を出し、通行を止めて辮髪を剃ることを禁じたが、五日間以内に全て剃り終るべしとした⁵⁴、と。ただし、翌一九一二年二月においても、湖南省では辮髪を剪ることを拒む者が多数おり、「湘潭県では、〔昨年旧暦〕九月、一〇月以来、人民の命令を遵守した者は既に一〇分の九に達したが、一〇分の一、二は剃っていないと聞いており、〔これらは〕頑固な田舎者にすぎない」と述べられていた⁵⁵。

湖南省都督の譚延闓が急務とした事柄の一つに、会党に対する対策がある。何となれば、清末の革命派の行った革命運動が会党の勢力を利用したことから、革命後には会党の増長がもたらされたからである。一九一二年一月一八日付け『申報』は、湖南省都督譚延闓による、次のような示諭を掲載した。「ここに大漢が盛んに興り、心願は既に成就し、目的もまた達成された。全ての洪江会、哥老会、及び三把香より発した富有会、大擺隊、鐵擺隊、十字会、更に未だ指名されていない各種名目、馬元帥、大元帥、坐堂、陪堂などの諸名称は、何時起こり何処に伝わったのかを論ぜずに均しく取り消し、漢を恢復するの本意に適合させるべきである。願わくは、汝ら、深く大義を明らかにし、悪事を踏まず、もし或いは外より生じ、党を結び群を成し、奸を作り法を犯し、甘んじて匪となり、治安を乱せば即座に捕えて法に照らし処罰し、風俗を整え人心を正すべきである⁵⁶、と。すなわち、旧来の会党に対して、即刻解散を命じた。しかし、この示諭の後も、会党による騒擾は止まなかった。そして、湖南社会の不穏が激化し始めた一九一二年七月、同様の示諭が再び提出された⁵⁷。

おわりに

一九一一年三月一日付け『申報』は、湖南省都督の次のような示諭を掲載している。「改革の事業は、列邦で盛んである。その間、鉄血相持し、数年或いは十数年に至り、始めて目的を達成した。我が中華民國の今回の義挙は、時を見るに僅か三ヶ月有余、激烈な競争の時代に和平的に解決したのは、古今中外で功績は光り輝けるものである。満・蔵・回・蒙は共に正に帰し、自ら慶祝を挙行し、大いに輿情を慰むべきである。ただ、この電〔中央政府大總統孫文の三月二五日に民国統一大慶典を挙行せよとの電〕が湖南に至ったのは、正午を過ぎており、預備が及ばず飾りも整わず、まして僻遠の地では一時に伝えようもないため、本月二七日（陰暦正月十日）に改めて民国大慶典を挙行することにした。湖南全省の大小の官署、水陸の軍営、遠近の商民は、均しくこの日に頒定せる紅・黄・藍・白・黒の五色の国旗を掛け、三日間盛挙を誇り、〔旧暦〕九月以後に掛けてきた白旗と二紅一黄旗は皆な撤去・交換し、画一に帰せ⁵⁸、と。湖南省で白旗が撤回され、五色旗に代えられた瞬間である。白旗がこの世の一切の汚濁、悪を洗い流す、清浄の意をイメージしたとすれば、五色旗の紅・黄・藍・白・黒は漢・満・蒙・回・

蔵の五族を表わした⁵⁹。このことは、白を象徴とした革命が、中国同盟会などの政治理念に基づいた「五族共和」に転換されたことを意味する。

湖南省の辛亥革命は、様々な要素から引き起こされた。第一は、郷土の清朝からの離反である。中でも、国会促成運動と鉄道国有化問題が、拍車をかけた。第二は、連年の水害と飢饉、経済恐慌と錢荘の倒産、更には物価騰貴と民衆の困窮、流民の輩出である。第三は、革命派の民衆に対する策動である。特に、会党と新軍が連携し、武装蜂起を企てるに至った。ただし、これらの諸要素を下支えしたのが、民衆の観念や世界観、すなわち末劫の到来、救世主の降臨、そして新しい世界の顕現に代表される、湖南省の民衆文化であったのである。革命後に現れた白い旗、白い腕章、漢の文字、戯劇の武生に扮した装いは、民衆の観念や世界観が象徴として歴史の表層に現れたのではなかったであろうか。ただし、革命の発生は民衆文化に支えられながら、革命の成果は新しい観念に取って代わられた。それが、白い旗に代わる五色旗の掲揚、旧暦に代わる西暦の採用、伝統行事に代わる記念式典の挙行であった。いわば、湖南省の革命は、民衆文化を原動力としながら、やがては知識人の示す文明化の理念にすり代えられていった。ただし、民衆の理念、世界観は歴史の深層に沈殿し、脈々と流れ、周期的に歴史の表層に現れるに至ったように思われるのである。

一九一一年の辛亥革命は、政治指導者や党派の思想、綱領、理念と、民衆の生活に根ざした世界観や願望との、重層構造からなつた。そこには、のちに語られ、意味の与えられてきた部分と、余り語られず、意味の与えられてこなかった部分がある。歴史とは、現在の立場から過去の出来事に意味を与え、叙述を行うものである。従って、叙述に、意味の与えられたものと意味の与えられなかったもの、語られてきたものと語られなかったものとの間に差の生ずることは、当然のことである。ただし、それらがなぜ意味が与えられ、語られたのかについては、改めて考える必要がある。歴史的事象とは、いわば一枚のコインのようなものなのではなからうか。コインの表だけを並べてみると、一つの物語を語ることができる。しかし、コインの裏側には、表の姿からは見えない、別の姿も張り付いている。それは、共和政体の樹立とは異なる、より土俗的で、より民衆の生活に密着した、民衆の観念や世界観である。焦達峯が姜守旦であるという謠言には、焦達峯の身に付随している民衆の観念が見出される。そして、それこそが、民衆が辛亥革命に見出した期待であったのである。

注

*日本の外交省文書を引用する場合、表題を除き、漢字を一部当用漢字に改め、かつ句読点を付し、片仮名を平仮名に改めた。年月日は西暦を記し、旧暦を用いる場合は「旧暦」の文字を記した。引用文中の()は原註、[]は引用者が補ったものである。また、引用文中の「……」は、中略である。なお、以下の史料は、()内のように略記した。

日本外務省外交史料館所蔵外交文書門一・類六・項一・号四一二一一一『各国内政関係雑纂 支那ノ部 革命党関係 別冊 革命党ノ動静探査員派遣』(『動静探査員派遣』と略記)。
同門五・類三・項二・号六八『支那長沙暴動一件』(『支那長沙暴動一件』と略記)。
イギリス外務省文書 FO371, General Correspondence: Political 1906-1922 (FO371 と略記)。

萍鄉市政協・瀏陽市政協・醴陵市政協合編『萍、瀏、醴起義資料匯編』 湖南人民出版社、一九八六年（『萍瀏醴資料匯編』と略記）。

中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『辛亥革命回憶録』第一集一第七集、文史資料出版社、一九八一年（『辛亥革命回憶録』一一七と略記）。

同明・志盛・雪雲編、粟戡時等『湖南反正追記』 湖南人民出版社、一九八一年（『湖南反正追記』と略記）。

饒懷民・藤谷浩悦編『長沙搶米風潮資料匯編』 岳麓書社、二〇〇一年（『長沙搶米資料匯編』と略記）。

1 閻幼甫「辛亥湖南光復的片断回憶」 『辛亥革命回憶録』二。

2 本報告に関連して、次の研究も併せ参照されたい。拙稿「清末、湖南省長沙の民衆文化と革命——一九一〇年の長沙米騒動における掲帖を中心に——」 『近きに在りて』第三九号、二〇〇一年、同「一九〇六年の萍瀏醴蜂起と民衆文化——中秋節における謠言を中心に——」 『史学雑誌』第一一三号第一〇号、二〇〇四年、など。

3 張鳴「民意与天意——辛亥革命的民衆回応散論」 中国史学会編『辛亥革命与二十世紀的中国』下 中央文献出版社、二〇〇二年。

4 掘地明「一九一〇年奉天・江北・湖南の搶糧・搶米」 『現代中国研究』第四号、一九九九年。

5 『湖南財政説明書』「湖南財政総説」。

6 梁啓超「湘乱感言」 一九一〇年四月二四日 『長沙搶米資料匯編』。

7 一九一〇年の長沙米騒動の経緯については、次の研究を参照されたい。拙稿「清末、湖南省における暴力と秩序——一九一〇年の長沙米騒動を中心に——」 『歴史評論』第六八一号、二〇〇六年。

8 Enclosure1:Hewlett to Max Müller, April 28, 1910, in Max Müller to Edward Grey, May 5, 1910, FO371/867.

9 「湘潭乱民阻耕之駭聞」 『大公報』〔天津〕一九一〇年六月一三日。

10 「湘潭乱事瑣誌」 『大公報』〔天津〕一九一〇年六月二七日。

11 一九一〇年の長沙米騒動後、長沙や湘潭、岳州では、数種の掲帖が収集されていた。まず、同年五月一四日にイギリスの軍艦「ブランブル」の司令官が岳州より海軍長官に与えた報告書には、三種の掲帖が英訳の上収められた。それは、八月一三日に海軍本部南西部より外務大臣エドワード・グレイに送られた。同じ頃、日本の長沙駐在副領事村山正隆も七種の掲帖を収集し、外務大臣小村寿太郎に送った。村山正隆の収集した七種の掲帖と「ブランブル」の司令官が収集した三種の掲帖の、合わせて十種のうち、二種は内容からみて同一である。従って、掲帖は八種となる（拙稿「關於英国和日本所蔵長沙搶米風潮档案資料的説明」 『長沙搶米資料匯編』）。

12 長沙駐在副領事村山正隆より外務大臣小村寿太郎あて「長沙及各地方一般近況報告ノ件」 一九一〇年五月二八日 『支那長沙暴動一件』。

13 Commanding Officer H.M.S. “Bramble” at Yo chou to The Senior British Naval Officer, May 14, 1910, in Admiralty S.W. to Edward Grey, August 13, 1910, FO371/868.

14 “The Changsha Riots”, *The North - China Herald & S.C. & C. Gazette*. May 20, 1910.

15 これについて、村山正隆は「青馬の日」を旧暦四月二〇日（西暦一九一〇年五月二八日）と解し、次のように述べた。「又去五月廿八日夜（即ち青馬の日）他の外国人等は多く船に逃れたる際の如きも、軍隊か謀反する企あるも、統領か承諾せずとの謠言あり、暗に統領の広告なりと疑わるゝ如き、皆軍隊に關聯せる所」云々（長沙駐在副領事村山正隆より外務大臣小村寿太郎あて「長沙暴動ニ關聯シ清国官紳ノ態度報告ノ件」（二） 一九一〇年六月三日 『支那長沙暴動一件』）、と。ただし、他の史料と照合すると、五月二八日は村山正隆の誤りであり、五月二九日が正しいことになる。

16 一九一〇年の長沙米騒動後に現れた掲帖の一つには、次のように記されている。「江山は変わることはない。幼な子の労苦も実らなかつた。秋には五子が現われるであろう。ただし現在は天機を洩らすことができない。離れても離れず、逢うても逢わず、あたかも日は海底に沈んだままで、人は酔夢の中にいるかのようだ。この時はまだ苦しみとはいえない。三四加一五、紅花が至る所に咲き乱れる時、そこに苦しみが訪れよう。困窮を畏れるなら、我れを信ぜよ。紅山は老叟に問へり。羊肉に泥むことを畏れよ。また、官の収穫を助くことを畏れよ。前人の田地を後人が収めても、なお収穫はある」（長沙駐在副領事村山正隆より外務大臣小村寿太郎あて「長沙及各地方一般近況報告ノ件」 一九一〇年五月二八日 『支那長沙暴動一件』）、と。また、一九〇〇年の義和団運動では、紅灯照の歌謡として「二四加一五、這苦不算苦、天下紅燈照、這時才算苦〔三四加一五、この時はまだ苦しみとはいえない。天下に紅燈照が現れる時、そこに苦しみが訪れよう〕」等の文字が現れていたのである（山東大学歴史系中国近代史教研室編『山東義和団調査資料選編』 齊魯書社、一九八〇年）。

17 “The Revolution in Changsha”, *The North - China Herald & S.C. & C. Gazette*, November 18, 1911.

- 18 周学舜『焦達峰』 上海人民出版社、一九八四年、周学舜「焦達峰陳作新与辛亥長沙光復」湖南史学会編『辛亥革命在湖南』 湖南人民出版社、一九八四年、焦伝愛・周学舜「記焦達峰身边的六位辛亥志士」『湖南文献』第四三輯、一九九一年。
- 19 長沙駐在副領事村山正隆より外務大臣小村寿太郎あて「長沙暴動ニ関聯シ清国官紳ノ態度報告ノ件」(二) 一九一〇年六月三日 『支那長沙暴動一件』。
- 20 焦伝愛・周学舜「記焦達峰身边的六位辛亥志士」 『湖南文献』第四三輯、一九九一年。
- 21 彭静華「姜守旦伝略」「姜守旦籍貫出身考略」 『萍瀏醴資料匯編』。
- 22 同治『瀏陽縣志』卷一三「兵防」 湖南省、一八七三年。
- 23 「要聞・萍鄉匪乱紀事」 『時報』一九〇七年一月一〇日 『萍瀏醴資料匯編』。
- 24 「五公末劫教」 王見川・林萬伝主編『明清民間宗教経卷』第一〇卷 新文豊出版公司、一九九九年。
- 25 張力『四川義和団運動』 四川人民出版社、一九八二年、三四—四七頁。
- 26 民国『統遵義府志』卷二六「年紀一」 貴州省、一九三六年。
- 27 遠藤保雄「服命書——湖南」 一九一一年二月二〇日 『動静探査員派遣』。
- 28 宗方小太郎「報告第二百十四号 支那に於ける秘密結社」 一九〇七年九月二八日 神谷正男編『宗方小太郎文書——近代中国秘録——』 原書房、一九七五年。
- 29 北嶺生「支那の風俗(十八) 在理会」 『大阪朝日新聞』一九一二年五月二五日。
- 30 「護理江西巡撫沈瑜慶奏武寧縣訪獲洪江会党摺」 一九〇八年四月一七日 『萍瀏醴資料匯編』。
- 31 李元標等口述・欧其夫整理「姜守旦率起義軍經過張坊」 『萍瀏醴資料匯編』。
- 32 欧遠福等口述・欧其夫整理「姜守旦打三口」 『萍瀏醴資料匯編』。
- 33 潘信之「起義大軍在瀏陽」、彭静華「姜守旦伝略」 『萍瀏醴資料匯編』。
- 34 「湘省由湖北調兵剿辦土匪詳誌」 『申報』一九〇六年一月二二日。
- 35 「商約大臣盛宣懷為萍瀏会党奪踞上栗事致軍機処等電」 一九〇六年一月九日 『萍瀏醴資料匯編』。
- 36 栄孝恵は、蜂起軍の白い布には、二つの意味があるとす。一つは蜂起軍の標識、他の一つは馬福益・李金奇への弔意と清朝に対する復仇である。ただし、汪文溥は後者の見解に疑問を呈し、白を五行相剋から解釈した(栄孝恵口述・張漢柏整理「丙午之役見聞」、汪文溥「醴陵平匪日記」 『萍瀏醴資料匯編』)。
- 37 「義寧州訪聞姜守旦又凶擾乱」 『申報』一九〇七年六月一二日。
- 38 「湘贛兩省会防边境匪乱情形」 『申報』一九〇七年六月二三日。
- 39 「稟陳謠言姜守旦復凶起事之原因」 『申報』一九〇七年七月三日。
- 40 一九一一年四月、湖南省華容県における蜂起では、次のように言われた。「華容県の会匪は、飢民が米騒動で騒擾を引き起こしたことにより、機会に乗じて鼓動し、数百人の大勢を集め、沿道で脅迫し、湖北省の飢民の先に計ること万余人を下らなかつた。そして、頃刻の間、大いに強奪を行った。……聞くところでは、今回の会首は前年の瀏陽の会匪首領の姜守旦であり、内より乱を煽り、このことによって甚だ猖獗を極めたという」(「華容之会匪」 『民立報』一九一一年四月一四日)、と。
- 41 鄒永成口述、楊思義筆記「鄒永成回憶録」 『近代史資料』一九五六年第三期。
- 42 粟戡時「湖南反正追記」 『湖南反正追記』。
- 43 戴鳳翔「我在辛亥革命前后的一段経歴」 『湖南文史』第四三輯、一九九三年。
- 44 「長沙焦陳兩都督被殺」 『申報』一九一一年一月九日。
- 45 「長沙光復後内訌余波」 『申報』一九一一年一月三日。
- 46 粟戡時「湖南反正追記」 『湖南反正追記』。
- 47 陶菊隱「長沙反正前後見聞」 『湖南文史資料選輯』第二輯、一九六一年。
- 48 子虚子「湘事記」卷一「軍事篇二」 『湖南反正追記』。
- 49 清代、人々の最大の娯楽は、戯劇である。戯劇は、人々に行爲や言語、思想など、生活様式全般に至って影響を与えた。換言すれば、人々は無意識のうちに、戯劇上の英雄の言葉や動作を真似、戯劇で形成されたある種規範に沿って行動した (Joseph W. Esherick, *The Origins of The Boxer Uprising*, University of California Press, 1987, p.315-331. 王加華「戯劇對義和団運動的影響」 『清史研究』二〇〇五年三期)。
- 50 「焦大章之假冒」 『民立報』一九一一年一月一五日。
- 51 「湘人光復荊州之榮譽」 『申報』一九一二年一月九日。
- 52 「举行祝捷会」 『申報』一九一二年一月一五日。
- 53 「湘省新猷種種」 『申報』一九一一年一月二二日。
- 54 凌盛儀「辛亥日記」一九一一年一月二二日の条 『湖南反正追記』。
- 55 「湘潭強迫剪辮之命案」 『申報』一九一二年二月二九日。
- 56 「湘都督消除会党之文告」 『申報』一九一二年一月一八日。
- 57 「通飭查禁会党」 『申報』一九一二年七月二三日。
- 58 「湘都督改期慶祝之文告」 『申報』一九一二年三月一日。

⁵⁹ 回は、広くイスラム教を信奉する民族を総称した。なお、五色旗の持つ意義については、次の研究を参照されたい。片岡一忠「辛亥革命時期の五族共和論をめぐって」 田中正美先生退官記念論集刊行会編『中国近現代史の諸問題——田中正美先生退官記念論集——』 国書刊行会、一九八四年、小野寺史郎「清末民初の国旗をめぐる構想と抗争」 『歴史学研究』第八〇三号、二〇〇五年、など。